

自己評価報告書

平成 23 年 3 月 1 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520013

研究課題名（和文） プラトン中期における「原因」概念とその後期に対する影響関係の検討

研究課題名（英文） Causes in the Middle Period of Plato's Philosophy and its Influence on Later Period

研究代表者

今泉 智之（IMAIZUMI TOMOYUKI）

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：30322978

研究分野：プラトンの哲学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：プラトン、『パイドン』、原因

1. 研究計画の概要

本研究は、「それ自体として独立のもの」、すなわちアイデアが存在することを前提し、この世界の事物の成立をアイデアとの関与で説明する、プラトン中期の著作『パイドン』の「アイデア原因説」の内実を見極めるとともに、その考え方が、後期の始まりに位置する『テアイテトス』にどの程度影響しているかを検討することを目的とする。平成 17-19 年度には、科学研究費の助成を受けて『テアイテトス』の認識論を研究してきた。『テアイテトス』は、「それ自体として独立なもの」を排除した上で議論が展開されているという点で、『パイドン』と対照的な関係にある著作である。したがって、『パイドン』の原因説を検討することによって『テアイテトス』の議論の意義が逆に照らし出されることも期待され、その意味で本研究は、これまで行ってきた『テアイテトス』研究を補完することも意図している。

2. 研究の進捗状況

平成 20 年度は、『パイドン』でアイデアの存在が前提されるのに先立ってなされている自然学者に対する批判、とくにアナクサゴラス批判の意義を検討した。当該箇所では「熱いものと冷たいものがある種の腐敗をするときに生物の組織はつくられる」「飲食をして、肉には肉が、骨には骨が付け加わると、小さい嵩のものが後に大きな嵩になり、小さい人間が大きくなる」「十が八より多いのは、二が加わっていることによってである」などの自然学説、さらに「知性が万物を秩序づけている」というアナクサゴラスの説が紹介され、批判されている。そこでは、アナクサゴラスが一方で知性のような非物質的なもの

を「原因」として立てておきながら、他方で空気、アイテールなどの物質をも原因と見なしていることの難点が指摘されている。プラトンはそのことを、人間の行為の原因として「知性」を立てながら、他方で身体の物理的な運動をも原因と考えることの不合理性になぞらえながら、説明している。本年度は、このように世界の成立を人間の行為の成り立ちと類比的に説明することの意義を、先行するアナクシメネス、ヒポクラテスなどの考え方も視野に入れながら検討し、自然と人間の双方に当てはまる包括的な原理を探求することが当時のギリシア人の一つの傾向であったことを示した（「自然」と人間——ギリシア思想の一側面）。

21 年度は、アリストテレスが『形而上学』第 1 卷第 9 章と『生成消滅論』第 2 卷第 9 章において行っている『パイドン』批判の意義を検討した。アリストテレスはこの二書において『パイドン』のアイデア原因説に言及し、いわゆる四原因（起動因、形相因、目的因、質料因）説の立場から、『パイドン』では形相因と起動因が混同されているとして批判している。これについては、アイデアに起動因の役割を帰しているとするアリストテレスの理解は正しいとする見方と、アリストテレスの『パイドン』理解は誤りであるとする解釈が対立している。本年度は『パイドン』のテキストを精読することにより、前者の解釈のほうが正しいことを示した。この研究成果は三重哲学会において発表した（「アリストテレスの『パイドン』批判」）。

22 年度は 21 年度の研究内容を継続した。とくに、アリストテレスの『パイドン』批判は正しいとする論者のうち、ハックフォースとファインを検討し、ファインの見方のほう

が、『パイドン』のテキストにより忠実であることを明らかにしたが、あわせて、当該の議論に現れる〈火〉、〈雪〉などを個物と見なすファンの解釈には疑問の余地があることも指摘した。21年度から継続していたこの研究の内容をさらに深めることによって、論文「アリストテレスの『パイドン』批判」として公刊することができた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
(理由)

本研究の主な課題は、次の四つに分けられる。すなわち(1)『パイドン』でアイデアの存在が前提されるのに先立ってなされている自然学者に対する批判は、アイデア原因説とどのような関係にあるのかを検討する。(2)『パイドン』のアイデア原因説では形相因と起動因が混同されているという、アリストテレスの『形而上学』と『生成消滅論』における批判は、『パイドン』の正しい理解にもとづいているのか否かを考察する。(3)そもそも『パイドン』の当該の議論に関して「原因」という訳語を用いるのは適切かという問題を検討する。(4)以上の『パイドン』研究でえられた知見をもとに、これまで行ってきた『テアイテトス』研究を補完し、従来のプラトン研究を一步でも進めることを目指す。このうち(1)については20年度に研究を行い、その成果は論文①として公表された。(2)については21-22年度に研究を行い、その成果は学会発表の①と論文③として発表した。また22年度には(3)についても研究を行い、その成果をなるべく早く論文として公刊したいと思っている。さらに、論文②は(4)についての部分的な研究成果である。以上により、本研究はこれまでのところ比較的順調に遂行されていると考えられる。

4. 今後の研究の推進方策

上述のように、22年度には『パイドン』の当該の議論に関して「原因」という訳語を用いるのは適切かという問題を検討した。しかし、論文として公表するには至らなかった。そこで研究の最終年度である23年度には、この議論について「原因」という訳語を当てるのは適当ではないと見なすヴラストスなどの解釈を検討しながら、この問題をあらためて考察し、論文として公刊したいと思っている。そのうえで、それまでの研究結果を踏まえながら、中期の著作である『パイドン』において示されているプラトンの世界観が、後期の著作『テアイテトス』で提示されている考え方とどのようにつながっているのかを検討したい。この問題については、21年度に行った『テアイテトス』研究についての部分的な成果(論文②)を生かすことができる

と考えられる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 今泉智之、「アリストテレスの『パイドン』批判」、『論集』第14号(三重大学人文学部哲学・思想学系、教育学部哲学・倫理学教室)、70-87頁、2010年、査読無
- ② 今泉智之、「倫理学の基層——古代ギリシアからの問い」、篠澤和久・馬淵浩二編『倫理学の地図』(ナカニシヤ出版)、207-236頁、2010年、査読無
- ③ 今泉智之、「「自然」と人間——ギリシア思想の一側面——」、片倉望編『自然の探究』(三重大学出版会)、71-83頁、2009年、査読無

〔学会発表〕(計1件)

- ① 「アリストテレスの『パイドン』批判」
三重哲学会、三重大学、2009年7月4日